

セッション3 WFP 拠出金

- WFP への拠出を拡充する必要性や、外交上の重要性については異論はない。
- 現在の国際状況を鑑み、ますますの WFP への日本のかかわりを期待したい。
- 食料支援を通じた世界の飢餓・貧困の解決に向けた意義ある取り組みである。世界 7 位の拠出に加えて、職員の派遣など一定の存在感がある。
- 食料支援を通じた世界の飢餓と貧困撲滅を目的としている WFP に拠出金を拠出する意義は高いと考える。
- WFP において邦人職員の比率が我が国の拠出比率を上回っていることは、日本が関与する国際機関では珍しいが、我が国の国際食料問題への高い関心を目に見える形で示す意味もあり、頼もしく思う。
- 邦人幹部職員の比率が少ない件については、その原因や具体的な方策を示していくことが必要である。
- 日本における知名度の低さなど課題もあり、活動の発信による国民の理解を更に得る必要がある。
- WFP は重要な任務を行っているにもかかわらず、国内においては、例えば UNICEF に比べて知名度が高くない。WFP 日本事務所、ITTO(国際熱帯木材機関)本部、JICA 海外移住資料館など横浜にある機関が相互に協力して、修学旅行生を積極的に受け入れる、スタンプラリーを開催するといった工夫がなされてもよい。
- 政策目標としている「日本の国際的なプレゼンスの維持・向上を目指すこと」について、少なくともアウトプット指標は設定する必要がある。
- 2022 年度の支援実績が増加しているが、世界の飢餓人口は増加している。この点、wfp のパフォーマンスに起因するものではないとのことだが拠出額を考慮すると、いずれ wfp のパフォーマンスの評価は必要と考えます。2022 年度については、新型コロナの影響、ウクライナ侵攻の影響によって拠出が増加したと思われるが、これらに対する支援の評価については今後期待する。
- 「コア」と「イヤーマーク」があり、コアについては WFP の組織全体に対する評価として、外務省内において他の国際機関と比較可能な形で行われている。一方で「イヤーマーク拠出」の評価においては、俯瞰的に確認できる成果報告が公開されていない。拠出の規模としてはイヤーマーク拠出がコア拠出の 20 倍近いことを踏まえた透明性の確保が必要である。
- 「飢餓の撲滅」という大きな課題の解決は WFP の活動だけでは難しく、短期、中期のアウトカム設定は難しい部分はあるが、予算額も相当にあり、WFP の活動の効果についてできる限り納得感のある説明を行っていく必要がある。今後の改善を期待する。
- 当初予算が極めて少なく、年次ごとに変化が大きい課題に関して、補正予算や ODA の多国間資金協力の予算を充当している。予見が難しいという事情は理解できるが、当初予算と決算に大きな乖離がある状態が常態化しているのは国家予算としての財政規律という観点から問題である。
- 課題として、当初予算と補正予算のバランスの適正化を可能な限り進める必要がある。
- 農水省が主導して策定した ASEAN+3 緊急コメ備蓄 (APTERR) という緊急時食料融通のスキームの経験は WFP にも相当程度活かせるのではないか。
- 国内の WFP 協会など民間セクターの活動状況の把握にもより一層努める必要がある。